様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３４３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２３７９

研究課題名（和文）侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデルの開発

研究課題名（英文）Development of an aftercare model for children who have experienced invasive procedures

研究代表者
今西　誠子（Imanishi, Tomoko）

京都先端科学大学・健康医療学部・教授

研究者番号：５０３２１０５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：採血や点滴などの侵襲的処置体験をした子どもの心理的回復のための援助実践に向けて「侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデル」を構築した。第1段階は、侵襲的処置後の子どもへの看護師の関わりと子どもの心理的回復の関係について、看護師を対象に面接調査を行った。第2段階は第1段階の結果を基に、侵襲的処置後の心理的回復に必要な援助について全国の看護師を対象に質問紙調査を行い、第1段階の調査結果と合わせ、侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデル(案)を作成した。第3段階で「侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデル(案)」を用いて看護師による援助を行い、有効性を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデルの構築は、侵襲的処置体験をする子どもに関わるすべての看護師が、侵襲的処置体験が子どもの成長発達につながる体験となるためのプレパレーション実践ができることが必要である。本ケアモデルは、プレパレーションの実践について侵襲的処置後の子どもの援助の質の保証を含めた支援となる。子どもの権利とQOLの向上、大学における共同研究の実施状況の理解に役立つと共に，小児看護の発展や看護研究活動の促進に結びつくものである

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to construct an aftercare model for children who have experienced invasive procedures involving needles such as blood tests or intravenous infusions. In first phase, the researcher interviewed nurses about the relationships between nurse's involvement with children and the children's psychological recovery after invasive procedures. In second phase,the researcher conducted nationwide survey for nurses in Japan asking what type of assistance required for children to recover psychologically after invasive procedures. The researcher developed a draft aftercare model for nurses to help children who have experienced invasive procedures. In the third phase, nurses used a draft aftercare model into their practice. After multiple practices were assessed and “Draft Aftercare Model for Children Who Have Experienced Invasive Procedures”was verified its effectiveness.

研究分野：小児看護

キーワード：子ども　侵襲的処置　心理的回復　ケアモデル　看護援助

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 現状のプレパレーション実践における侵襲的処置後の子どもの心理的回復についての検討の不十分さ

健康障害を生じ、入院を必要とする子どもは健康回復のために採血や点滴などの医療行為を受ける。採血や点滴などの針を刺す医療行為は侵襲的処置にあたり、子どもにとって非日常的である。採血や点滴などの非日常的な侵襲的処置体験は子どもには、様々な心理的影響を与える。

現状のプレパレーションは、侵襲的処置中の心理的混乱行動を緩和する心の準備への援助にとどまっている（浅他、2015；三村他、2013）。看護師の援助が子どもの心理的回復を促す可能性を示唆する研究は存在するが（今西他、2013）、子どもにとっての侵襲的処置体験の克服や意味付けへの看護援助の検討はされておらず、支援の現状は明確にされていない。

(2) 侵襲的処置前後におけるプレパレーションの質保証のための実践的ケアモデルの必要性

非日常的な侵襲的処置体験の子どもへの意味づけは、子どもへの看護師の関わりに左右される（今西、2008）。侵襲的処置前から侵襲的処置後を通して子どもの体験を意味づける援助の実施は入院中の子どもの QOL の向上と、人間的成長を促すものである。よって、現在臨床で実践されている侵襲的処置前のプレパレーションだけではなく、侵襲的処置後の子どもへの援助の質を保証するための看護師の関わりを示したアフターケアモデルの構築が必要である。さらに侵襲的処置後の援助を保証するためには、侵襲的処置後の援助が看護師の経験や力量に依存しない、業務的煩雑さになおざりにされないために、侵襲的処置を受けた子どもへの援助基盤の確立すなわち侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデルの開発が必要不可欠である。

２．研究の目的

本研究は、侵襲的処置後の看護援助の現状から、子どもへの侵襲的処置後の援助における課題について明らかにし、侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデルの構築を目的とする。

３．研究の方法

本研究は、子どもの侵襲的処置体験に対する意識の変化に焦点を当て、看護師が実践している侵襲的処置体験をする子どもへの看護援助と課題を質的・量的に協同的チーム・アプローチ（Doorenbos Ardith Z、2014）により明らかにする。更に、研究者と看護師が協力して侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデルの構築を目指す混合研究法とする。

①第 1 段階は看護師への面接による看護援助の実態調査により侵襲的処置後の看護の課題の明確化を図る。

②第 2 段階は各都道府県の病院で働く看護師への質問紙調査から侵襲的処置後に必要とされる看護実践について明らかにする。

③第 3 段階は看護師へのグループインタビューによるアフターケアモデルを構築する。

(1) 第 1 段階（面接調査）

研究参加者は、本研究に同意が得られた小児入院病床で働く看護師である。対象となる看護師に侵襲的処置を体験した子どもに実践されている看護援助と心理的回援助について半構造化面接を行った。面接内容から逐語録を作成し、カテゴリーを抽出する質的記述的分析法を用いて分析を行った。

(2) 第 2 段階（質問紙調査）

本研究に協力の同意が得られた 789 施設の小児入院病棟に勤務する看護師 1578 名を対象に郵送法による無記名自記式質問紙調査を行った。

調査内容は、対象者の基本属性と独自作成した「侵襲的処置体験からの心理的回復に向けた看護援助の実践度と必要度について」の 64 項目と自由記述 2 項目で構成した。4 段階リッカート法を用いた。

数値的データは SPSS Statistics for Windows(Ver.25)を用いて記述統計を算出した。

(3)第 3 段階（介入調査）

①侵襲的処置体験をした子どもへのケアモデルの作成

第 1 段階、2 段階の調査結果、及び文献検討を基に、明らかにした侵襲的処置体験をする子どもへ実践されている援助内容を精選し、「侵襲的処置体験をした子どもへのケアモデル」案を作成した。

②侵襲的処置体験をした子どもへのケアモデルの検証

看護師らを対象に実践的看護介入前後に「侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデル」の実践的活用について各一回ずつグループディスカッションを実施した。インタビュー内容をデータとし、質的記述的研究法で分析した。対象看護師は、総合病院小児病棟に勤務する小児看護経験 2 年以上とした。侵襲的処置体験をした子どもへのケアモデル実施の対象者は、侵襲的処置体験をする 3～7 歳の子どもとその家族とした。

【倫理的配慮】
(1) 第 1 段階（面接調査）
対象者へは、研究の趣旨及び参加の任意性、個人情報保護等について口頭及び文書で説明し、文書で同意を得た。京都学園大学（現京都先端科学大学）研究倫理審査委員会及び聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得た。
(2) 第 2 段階（質問紙調査）
研究協力の同意を得た施設の看護師に、調査目的や方法、倫理的配慮を記載した依頼文書と調査用紙を送付した。調査用紙の返送をもって参加の同意とした。京都学園大学（現京都先端科学大学）研究倫理審査委員会及び聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得た。
(3) 第 3 段階（介入調査）
対象者へは、研究実施施設の倫理委員会の承認を得て、研究目的、方法、個人情報の保護、参加の任意性、研究成果の公表等を文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。京都先端科学大学研究倫理審査委員会及び聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得た。

４．研究成果
(1) 第 1 段階（面接調査）
研究参加者は 8 名で、小児看護経験年数は 5 年から 10 年であった。対象となった看護師らは採血、点滴確保、腰椎穿刺などの援助を経験していた。分析の結果、子どもの侵襲的処置体験からの心理的回復に向けた看護師の関わりについては、267 コード、24 サブカテゴリー、11 カテゴリーが抽出された。カテゴリーは侵襲的処置前、侵襲的処置中、侵襲的処置後、侵襲的処置前から侵襲的処置後までの全般の枠組みで整理した。抽出されたカテゴリーは、侵襲的処置前が、【侵襲的処置に対する理解しやすい説明】【侵襲的処置に対する思いへの配慮】【侵襲的処置に対する緊張の緩和】【母親と子どもの関係を把握した関与】、侵襲的処置中は【侵襲的処置による恐怖の軽減】、侵襲的処置後は【侵襲的処置体験による緊張の緩衝】【子どもの侵襲的処置体験の家族による承認への支援】【子どもの侵襲的処置体験の承認】【侵襲的処置体験後の子どもの気持ちの容認】【侵襲的処置体験後の子どもと看護師との関係の再構築】、侵襲的処置前から侵襲的処置後までの全般は【病棟全体における子どもの侵襲的処置時の対応の検討】であった。侵襲的処置体験からの心理的回復に向けた援助を侵襲的処置の進行段階に応じて図１に示した。

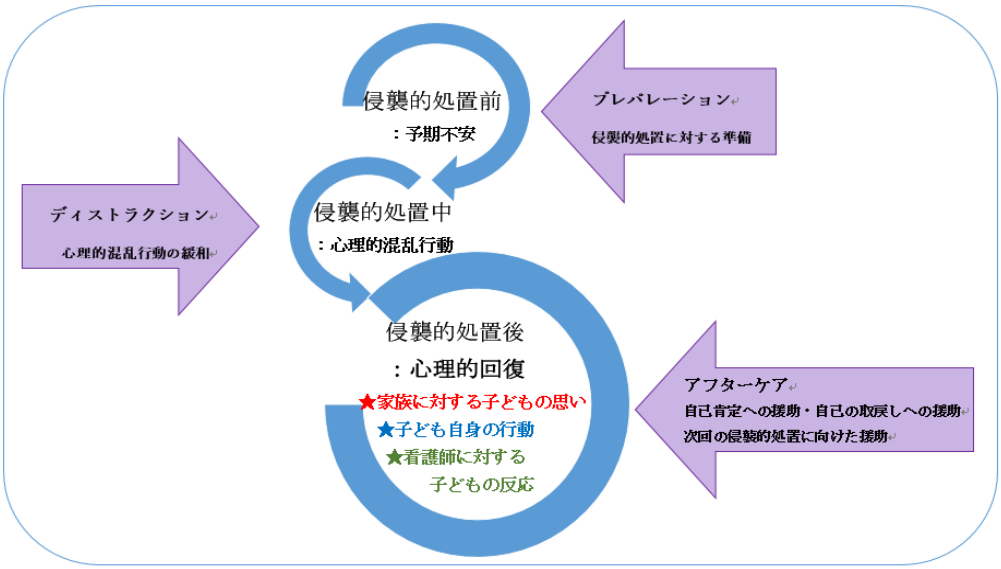

図 1．侵襲的処置の各段階における子どもの心理的回復を促す看護師の関わり

(2) 第 2 段階（質問紙調査）
調査対象の施設は、789 施設（対象者数 1,578 名）で、634 部が回収され（回収率 40.2%）有効回答は 573 部（有効回答率 90.4%）であった。
対象者の背景は、看護師の平均経験年数は 10.8（SD7.6）年（範囲 5−33）で、小児看護の平均経験年数は 4.2（SD2.9）年（範囲 3−20）であった。対象者が経験した侵襲的処置看護は、採血、点滴確保、注射が最多で、腰椎穿刺、骨髄穿刺、その他であった。
侵襲的処置体験をする子どもと家族への看護援助の実践度の平均値は 80.0%（範囲 38.5～99.8%）、侵襲的処置体験からの心理的回復に向けた看護援助の必要度の平均値は 95.5%（範囲 83.6～100%）であった。
各看護援助項目における実践度の割合と必要度の割合がともにそれぞれの平均値以上の項目は 35 項目あり、中でも「子どもに処置が終了したことを伝えて緊張を解くようにしている」「子

どもの頑張っている様子にあわせて、声を掛けている」「子どもの処置対応を繰り返しほめ、認めるようにしている」の 3 項目は必要度が 100%であった。

実践度の割合が 50%未満で必要度の割合が 95.5%未満は、「家族と処置について誰が子どもに説明するかを相談している」「家族と処置についての説明時期を相談している」「処置対応でよかったことを子どもとリフレクション（振り返り）を行っている」「看護師間で処置についての子どもへの説明時期を検討している」「医療者間で処置時の家族の同席を、子どもの希望を踏まえ相談している」の 5 項目であった。看護師の多くが侵襲的処置体験からの心理的回復に向けた看護援助を必要と考え、実践している。一方、必要度の割合が平均値未満で、実践度が 50.0%未満の 5 項目は、看護師にとっては実践が難しい看護援助であり、特に「処置対応でよかったことを子どもとリフレクション（振り返り）を行っている」は、侵襲的処置後における状況に応じたプレパレーションの実践の難しさを示していることが確認できた。

(3) 第 3 段階（介入調査）

ケアモデルの作成

第 2 段階の調査結果から、1）実用性の割合が高く、必要性の割合が高いものと 2）実用性の割合が低く、必要性の割合が高いものを抽出した。3）自由記述の中から、看護師が実践したい援助項目を抽出した。4）1～3 より、実践度・必要度が高いとして看護師が取り入れたい項目を、子どもの心理的回復を促すための援助として選定し、侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデル（案）を作成した（図 2）。ケアモデルは、「侵襲的治療体験からの子どもの心理的回復」を中心に、時間経過で変化が見られた。

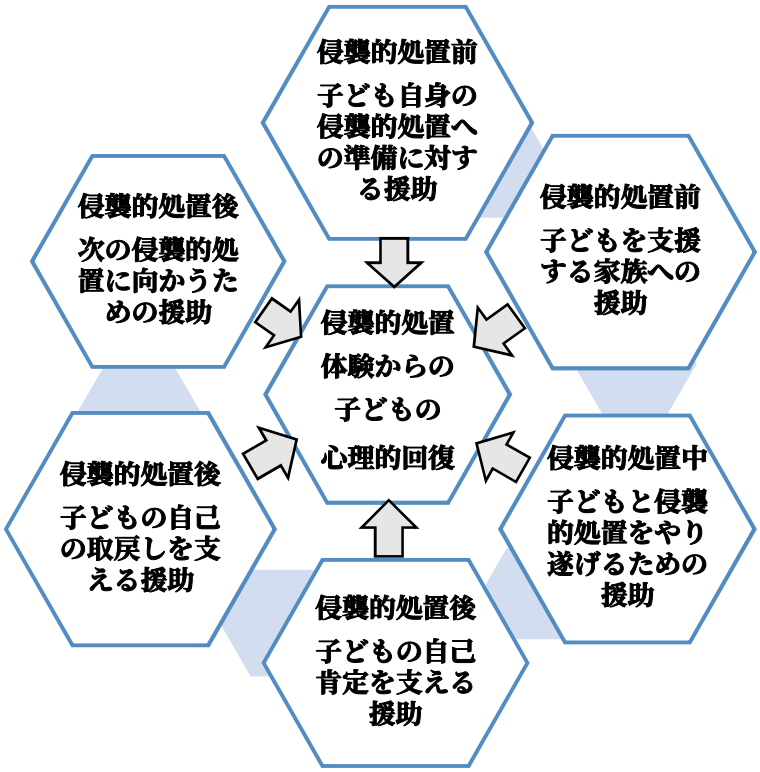

図 2．侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデル（案）

近畿・東海圏内の総合病院 2 施設の小児入院病棟に勤務し、侵襲的処置体験をする子どもと家族への援助経験がある看護師 7 名の協力が得られた。ケアモデルの実践対象者となった子どもは、3 歳 1 名、4 歳が 3 名、5 歳が 2 名、女児 3 名、男児 3 名の計 6 名であった。対象者がケアモデルの実践的看護介入した侵襲的処置は、採血、点滴確保であった。「看護師らのケアモデルのとらえ方」について、ケアモデル実践前では 4 カテゴリー10 サブカテゴリー、ケアモデル実践後では、5 カテゴリー15 サブカテゴリーが抽出された。

開発したケアモデルは、侵襲処置体験に携わる看護師が実践する援助と、侵襲処置体験からの心理的回復のために看護師が必要とし実践したい援助に沿ったものである。

看護師はケアモデルの援助内容に不足はなく実践的活用が可能と判断していたが、子どもへの援助の初心者である看護師の「子どもの侵襲的処置体験をマネジメントする力」を助けるための実践例などを示したガイドドラインの作成、さらには「ケアモデルの看護実践の困難性」の改善に向けて、看護師自身が子どもの心理的回復を評価できる評価指標（侵襲的処置体験をした子どもへのアフターケアモデルの評価基準）の作成の必要性が示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 今西誠子　市江和子	４．巻 11（5）
２．論文標題 侵襲的処置からの心理的回復に向けて看護師が必要と考える子どもと家族への看護援助	５．発行年 2020年
３．雑誌名 せいれい看護学会誌	６．最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今西誠子　市江和子	４．巻 28 巻
２．論文標題 侵襲的処置体験からの子どもの心理的回復を促進するための看護援助	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本小児看護学会	６．最初と最後の頁 132ー138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20625/jschn.28_132	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 今西誠子　市江和子
２．発表標題 Care for children’s psychological recovery after invasive treatment
３．学会等名 ICN Congress　Nursing Around the World（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tomoko Imanisshi　　Kazuko Ichie
２．発表標題 A Survey on Nursing Aid for Children that Facilitates Psychological Recovery from Invasive Treatment in Pediatric and Mixed Wards
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 今西誠子　市江和子
２．発表標題 A Survey on Nursing Aid that Facilitates Psychological Recovery in Children and Their Families after Invasive Treatment
３．学会等名 22nd EAFONS 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 今西誠子　市江和子
２．発表標題 Child's reaction toward psychological recovery from the invasive treatment experience grasped by pediatric nurses
３．学会等名 Seirei International Research Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 今西誠子　市江和子
２．発表標題 Children’s responses following invasive procedures as viewed by nurses working in pediatric wards
３．学会等名 TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	渡曾　淳子 (Watarai Junko)	中津川市民病院・看護部	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	北村　洋子 (Kitamura Youko)	京都鞍馬口医療センター・看護部	
研究協力者	岩崎　由美子 (iwasaki Yumiko)	京都市立病院・看護部	
研究協力者	大鐘　美幸 (Oogane Miyuki)	津島市民病院・看護部	
連携研究者	市江　和子 (Iche Kazuko) (00279994)	聖隷クリストファー大学・看護学部・教授 (33804)	
連携研究者	宮良　淳子 (Miyara Junko) (90597949)	中京学院大学・看護学部・准教授 (33706)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関